

だ ろい あ ぐ

東京彩人記

小児がんや慢性疾患と闘う子どもたちや家族の心を支える活動に取り組む、NPO法人「シャイン・オンキッズ」。多岐にわたる活動のなかでも、子どもたちがつらい治療や検査を乗り越えるためにビーズを糸に連ねる「ビーズ・オブ・カレッジ(勇気のビーズ)」は、国内で唯一の取り組みという。事務局長のニーリー美穂さん(49)に話を聞いた。

【谷本仁美】

——どのような経緯で活動を始めたのですか。

出産を機に子どもを笑顔にすることをライフワークにしたいと思いました。夫の仕事の関係でニューヨークにも住みましたが、社会全体で子どもたちを笑顔にしていこうという、日本にはないものがありました。また、短い間でしたが、子どもたちが2人とも入院しました。今思い出しても、とても大変で……。病気の子どもがいる家庭の気持ちを少しでも知っていたので、自宅でチャリティーコンサ

ートを企画し、会費をタイラー基金(NPOの前身)に届けていました。たまたま、前事務局長が産休に入る際に打診を受け、事務局長に就きました。

——主な活動は。

大きく分けて▽ビーズ・オブ・カレッジ▽特定の訓練を受けて病院に常勤し入院中の子どもたちを支えるファシリテイドッグ▽チャリティーコンサートなどのイベント開催——です。ビーズ・オブ・カレッジは国内では19病院が導入しています。初めに、子ども

NPO法人シャイン・オン!キッズ事務局長 ニーリー美穂さん(49)

私たちはアルファベットのビーズで自分の名前を作り出す。そして、さまざまな治療を経験するたびに、例えば採血は黒、輸血は赤などそれぞれの治療を象徴するビーズを、医師や看護師など研修を受けた「ビーズ大使」から受け取ります。

小児がんの子どもたちが9カ月〜1年の治療を通じて受け取るビーズは、800〜900個にもなります。自分のマイルストーン

自分には乗り越えられたと前向きにとらえられるようになります。

——私たちが参加できる寄付プログラム「チーム・ビーズ・オブ・カレッジ」もありますね。

これは、日本が一番盛りださったもので、どれも1組ずつしかない一点物。手作りのビーズに込められた思いには、何か力があると感じます。

子どもを笑顔にしたい



ニーリー・みほ 1967年生まれ。金融機関、テレビ制作会社、コンサルティング会社などを経て、2015年にシャイン・オン!キッズ事務局長に就任した。アメリカ人の夫との間に1男1女。

——今後の活動は。

チーム・ビーズ・オブ・カレッジを広く知ってほしいと思います。より多くの人に、少しでも多く社会貢献するきっかけ作りができるのがNPO。社会全体が大きく動く仕掛けを作る視点が大切だと思います。

記者の一言

NPOの代表、キンバリーさんは1歳の長男、タイラー君を白血病で亡くした。生きていればニーリーさんの長女と同じ年齢。子育て中のスタッフも多く、他人を思いやる優しさが活動の原動力だと感じた。

大学女子の優秀チーム

アナタヤま、首都バン



フェーで開かれた。障害者が農業の担い手となる農福連携に取り組む農福連携推進財団

栽培を始めており、日本の農業を変える力がある」と話した。小林さん「社会内意識の

都立高への出願 1日目4万7671人 全日制1.49倍